

第8回こうち介護の日
ポスター・作文コンテスト

受賞作品

ポスター
部門

第8回

こうち 介護の日

11
いい日 11
いい日、笑顔
がいいね

11月11日 介護の日

人と向きあい
笑顔をつなぐ、
介護のしごと

平成29年11月
高知県

第8回こうち介護の日
ポスター・作文コンテスト

受賞作品



「いろいろな手」
土佐市立宇佐小学校 3年
くぼ はるま
久保 遥雅さん





「皆で支援 地域の介護」

高知県立高知南中学校 1年

こばし あやな
小橋 彩那さん

第8回こうち介護の日
ポスター・作文コンテスト

受賞作品



いつも互いに支え愛!

介護の日



「いつも互いに支え愛」
高知県立高知南中学校 1年

はまぐち ゆうな
濱口 夕七さん

11月11日
～介護の日～



介護には

人を笑顔にする

力がある！



「笑顔の力」

高知県立宿毛高等学校 3年

濱田 あおいさん

小学の部
優秀



小学の部
優秀

「11月11日は介護の日」

香美市立山田小学校 6年

はんだ ともは
半田 朋葉さん



「家族のえがお」

土佐市立宇佐小学校 3年

のむら りく
野村 莉玖さん

小学の部
入選



「心と心でやさしさを」

土佐市立宇佐小学校 3年

おおち さき
大地 早紀さん



小学の部
入選

「ともに生きよう」

土佐市立宇佐小学校 3年

ほりいけ なな
堀池 菜那さん



「寄り添う心を大切に」
高知県立高知南中学校 3年

さかなか こころ
坂中 心さん



「笑顔の理由がここにある」
須崎市立須崎中学校 3年

つぼうち みお
坪内 三桜さん



「笑顔で広がる介護の輪」
高知県立高知南中学校 3年

おかむら かりん
岡村 香凛さん

体験し初めて気づいた…

思いやり!



い い い い かいご ひ
11月11日 介護の日

高校の部
優秀

「思いやり!」

高知県立宿毛高等学校 3年

さかた けいご
坂田 恵悟さん

心を込めて介護を



11月11日

介護の日

高校の部
優秀

「寄り添う介護」

高知県立宿毛高等学校 3年

やまもと れな
山本 怜奈さん

介護は空のように広く

高校の部
入選



11月11日
介護の日

世界を心でつなぐ
バトンパス

「心のバトン」

高知県立宿毛高等学校 3年

やまおか
山岡 りささん

高校の部
入選



「今も過去も」

高知県立春野高等学校 1年

ちかさわ いずみ
近澤 育純さん

『施設見学をとおして 私が学んだこと』

高知県立春野高等学校二年 辻村 優衣さん

高校の部
入選

私は現在、春野高校で将来保育士になることを夢見て、勉強や部活動に取り組んでいます。しかしながら、高校に入学するまでは、保育士の仕事が福祉の仕事の一つであるという認識もなく、二年生になり「生活と福祉」や「子どもの発達と保育」といった科目を学習していく中で、福祉に関する様々な仕事の内容や高齢者を取り巻く現状等を知りました。

また、授業で近くの特別養護老人ホームを訪問した際には、施設内がとても明るく清潔で、入所者の方々が居心地よく生活できるようにプライバシーに配慮した間取りやデザインになっていることを知りました。同じ建物内には居酒屋や保育所、畑や売店まであり、これまで私が抱いていたイメージと全くかけ離れたものでした。案内してくださった若いスタッフの方が、「介護の仕事は人生の先輩から貴重な手柄を沢山教えて頂けるうえに、お給料まで頂けるとても楽しい仕事です。」と笑顔で話してくださいました。ですが、この言葉は私にとってとても衝撃的でした。というのも、介護施設は病院のような所で、介護の仕事は周りの人の話などから、毎日とても大変でひたすら疲れる仕事なのだろうと勝手に思い込んでいたからです。

施設への入所を希望しているにも関わらず、待機している高齢者の数や介護従事者が今後県内で約九百名も必要だということなど、介護を取り巻く状況の厳しさについても教えていただき、最後に「高校生にできることは何かを考え、できることから取り組んでいってほしい。」というエールもいただきました。

改めて、私たち高校生にでもできることは何かと考えてみると、高齢者の心身の特徴を理解したうえで、のんびりとした声かけなど、相手の立場を考えた簡単なことで良いのかもしれないと思えました。まずは、身近にいる高齢者に笑顔になってもらうことができれば、皆が幸せに暮らせる社会が実現するのではないかと思います。

私は将来保育士になり、未来を生きる子どもの保育に関わっていきたくと思っていますが、今後は、今まで以上に授業やボランティア活動をとおして様々な世代の方々とかかわりをもち、コミュニケーション能力を身に付けていきたいと思います。そして、事前学習で伺った「福祉は人に幸せを与える仕事である」という言葉を忘れずに、高齢者福祉や介護の問題を他人事にせず、きちんと向き合っていくように思います。

『私にとっての介護』

高知県立室戸高等学校三年 渡邊 亜梨沙さん

高校の部
入選

私は今年の五月に、特別養護老人ホームで介護実習を行った。この時が私にとって、初めての介護だった。これまで「介護」という言葉に全くと言っていいほど関わる事がなかった私は、自分に介護ができるのかどうか不安を抱えていた。

しかし、実際に介護現場を体験して沸き起こってきた感情は、「楽しい」だった。利用者の方とコミュニケーションをとることはもちろん、排泄介助や入浴介助、食事介助も全てが楽しく感じた。介助される利用者の方にとっては、楽しいと思われていることが不快かもしれない。あるいは介護する側が楽しいと感じることは不適切かもしれない。それでも楽しかったと言える。もちろん楽しいことばかりではないのだが、実習前に抱えていた不安は、いつの間にか消えていた。なぜだろう。それは実習が終わった今だからわかる。私は、介護を「している」と感じていなかった。ただ施設に行くと、その日一日を一緒に過ごして帰ってくる。その繰り返し。毎日そう思って過ごしていた。それが「楽しい」理由なのかもしれない。

私が介護について考えるにあたり、「世の中の介護」に目を向けてみた。私が新聞やニュースで見える介護は、高齢者虐待がほとんどだ。介護に疲れていたとしても、利用者の方に対して酷いことをするという行為は絶対にあってはならない。しかし私が室戸高校で学んだ「介護」は、新聞やニュースでよく目にする辛いことばかりではなかった。辛いことの先には必ず楽しいことがあった。その楽しさを求めて次の日も頑張ろうと思えた。だから介護には辛いことばかりではないということ、そして辛いことがあっても、楽しい仕事なんだということ、それをたくさんの人にわかってもらいたい。そして高齢者虐待がなくなっていくことを祈っている。

私は将来、どのような仕事に就くのかをまだ考えていないが、室戸高校に入学して介護について勉強したことは忘れずにいようと思う。いつか自分の親が要介護状態となったときは、私が面倒をみてあげたいと思っている。そのために、室戸高校で学んだことや体験したことを十分に活かせるように、残り少ない授業のなかでより多くの知識と技術を身につけたい。

高校三年間の中で、少しではあるが介護に携われたことを誇りに思っている。

『人の心に寄りそうこと』

土佐女子高等学校二年 西田 花子はなこさん

高校の部
優秀

私は、介護というものに大変な作業のイメージしか無く、あまり良い印象を持っていませんでした。食事、入浴、排泄等、全ての作業を支えるのはどれだけ辛く苦しいだろうかということばかり頭に浮かべていました。けれど、中学三年生の時、進路ガイダンスで福祉の講座を受けた機会があり、そこで介護に対する印象が大きく変わりました。

講座の内容は、実際に、立ち座りの介護の実習を友達同士でするというもので、私は最初座った友達を立たせるために、ただ腕を引っ張りました。しかし、それだけでは相手は立ち上がれないことに気づきました。動作を行わせることだけを考え、無理矢理作業しても人は立てない、相手の気持ちを考えて立ち上がることが出来るような動作をする必要があると、講師の方は教えてくれました。そして座った人の腕を優しく下に引いて立ち上がりやすいよう配慮しながら動作を手伝う、介護の手法を見せてくれました。

「介護は、人の心に寄りそうこと。」
その時間聞いた講師の方の言葉が、強く胸に響き、今まで抱いていた介護のイメージが崩れ去るのを感じました。日常生活の作業を手伝うだけではなく、相手の心に触れ、そっと手を差し伸べて支える、介護とはそんな温かさとししさを待つ行為なのだと思えました。

また、講師の方は、実際に介護の仕事をしていて、一番嬉しいのは相手から言われる感謝の言葉だと話されました。自分だけが支えているのではなく、その言葉で自身も支えられている。心と心でつながり合い、救い合う、人間としての素晴らしさを感じました。対話し、相手を受け入れて見つめ直す。思いに触れて気持ちを扱い笑顔が生まれる。介護は大変だけれど、決してそれだけではなくたくさんの得るものがあるのだ。そう強く感じました。そして私自身もそんな風に人の心に寄りそえるような、介護の仕事がしたいと思うようになりました。

現在私の住んでいる高知県では、高齢化が進み、介護職員の不足が問題となっています。私はこの状況を変えていく手助けがしたいです。たくさんの介護を求めている中で、少しでも力になることができたらと思うと、介護士になりたいという気持ちが一層強くなりました。

これから生きていく中で、私はたくさんの人と出会うと思えます。一人一人を思いやる気持ち、感謝を抱きながらそれを広げて、介護の心につなげていきたいです。

『助け合い支えあう高知県に』

高知県立高知農業高等学校三年 山本 真奈可まなかさん

高校の部
優秀

私の住む香美市土佐山田町の高齢化率は三十四%を超えている。この数値は、高知県の高齢化率よりも高い。私の近所も高齢者が多い。また、私の家から目に入る場所には介護施設が三つもある。

私は小学生のとき、その介護施設へボランティアに行く機会が何度あった。入居している高齢者や障害者と会話をしたり、ご飯を食べさせてあげたりなど、その当時のことは今も覚えている。土佐山田町に住んでいて、入居している人も多く、昔のことをおもしろくおかしく話してくれた。帰るときは、「ありがと」「また来てね」と笑顔で手を振ってくれたのを覚えている。

「介護」という言葉を聞くと、付きっきりでの世話や生活のすべてにおいて面倒を見てあげるなど、何から何までやってあげるというイメージが多いのではないだろうか。私の考えは違う。その考えを改めてほしいのだ。介護とは、どうしても自力ではできない、人の助けが必要であるときに手助けをするという形こそが介護だと思える。何から何までやってあげるのは、その人のできる力も奪っているように感じる。

高知県の高齢化は全国よりも速いスピードで進んでいる。高齢化の進行に伴い、介護を必要とする人も増加することは避けられない。しかし、介護士が増加するとは断言できない。高知県は高齢化とともに少子化も進んでいる。そんな現状の中で、介護を必要とする人が介護を受けながらどのくらい自立した生活ができるかが課題になってくると思う。介護を必要とする人の中にも、できる限り自立した生活を送りたいという人がいるはずだ。

高齢者がいつまでも現役で暮らすためにはどのようなことが必要だろうか。やはり、一番は健康だと思える。それだけではなく、生きがいを持ち、毎日を楽しみたいと思える。もっと生きたいと思っほしいのだ。私は将来、医療ソーシャルワーカーとして働きたいと思っている。患者として病院を訪れる高齢者や障害者が、社会復帰できるようにサポートしていききたい。病院を退院した後、一人でも多くの人が自立した生活を送れるように患者と地域の橋渡しをしたい。私の夢はどんとんと広がる。そして夢が実現した先には、地域の人すべての笑顔があると思っている。

介護を必要とする人と介護をする人という関係はもう古いと思う。介護を必要とするときと介護をするときというようにお互いに行き来できる部分やできない部分を補っていき、助け合っていくべきなのではないか。

高齢者も障害者も若者も、地域の人すべてが、人と関わり、地域と関わり、社会に参加して支え合うことができれば、高知家のスロガン、「高知県はひとつの大家族やき。高知家ながよ」が実現するのだと思う。みんなで助け合い支えあう高知県になってほしい。

『曾祖母のつらさ』

いの町立吾北中学校三年 山中 美佑奈さん

中学の部
入選

私は、八十九歳になる曾祖母がいます。曾祖母は足が悪い上に、認知症にかかっています。家では曾祖母の世話ができないので、今は病院にいます。私は、部活が忙しかったこともあって、最近全然会いに行けていません。曾祖母を見るたびに、やせているなと思います。手足が細くて、私が触ると折れてしまいそうです。私が会いに行くときとちゃんと話をしてくれます。元気なときはよくしゃべります。ただ、認知症を患っているので、同じことを二回言ったりもします。そんなとき、私は、二回目だしと思って聞いています。それでも、曾祖母と話することは楽しいです。曾祖母は、お見舞いに来た私たちが誰なのかも分からなくなることもありますが、私がお見舞いに来た私たちが誰なのかも分からなくなることもありません。

と大きな声で言うと、ちゃんとうなずいてくれます。実は、私は、曾祖母はなぜ同じことを何回も言うのか分かりませんでした。認知症の原因だということが分かってからは、ちゃんと話を聞いてあげようとか努力しています。

この間、学校で高齢者についての授業を受け、認知症について学習しました。認知症になると周りの人にも迷惑がかかって大変ですが、本人もどうしたらいいか分からなくて不安でつらいということが分かりました。また、認知症にかかると今まで当たり前でできていたことができなくなり、生活にも支障をきたしてしまふそうです。この話を聞いて、私は、初めて曾祖母のつらさが分かった気がしました。曾祖母はつらいとは口にはしませんが、心はいつも痛かったのです。私は自分ももし認知症になったらどうしようかと考えました。不安のあまり人と話したくなくなり、精神的にダメージを受けて病んでしまふかも知れません。今日が何月何日だとか目の前にいる人が誰なのかも分からなくなつて外にも出られずにつつと家にこもつてしまふかも知れません。

高齢者疑似体験の出前授業で、障がいのある人の身になる体験や白内障の人の体験をしました。白内障の体験では眼鏡をかけて料理を見ましたが、あまりおいしそうには見えませんでした。さらにアイマスクをして廊下を歩き、階段を上り下りしましたが、今自分がどこを歩いているのか不安でとても怖かったです。体が不自由だったり、高齢で自分の思うように体が動かなくなつたりするといろいろなことが不自由になり、支障をきたして大変だということが実感できました。

高齢者疑似体験をしなければ、認知症の曾祖母の大変さや体の不自由さは分からなかったかもしれません。すべては分からなくても授業を受ける前よりは分かったと思います。介護はやはり大変ですが、曾祖母と接するときには今までよりも大きな心で優しくすることはできると思います。曾祖母と接するときには、ずっと笑顔でいることができるようになりたいと思いました。

『私のできること』

高知県立高知農業高等学校三年 栗山 亜優香さん

高校の部
優秀

高知県の高齢化率は三十二・八%。全国二位だ。私は将来看護師になり、高齢者を専門にした病院で働きたいと思っています。

小さい時から祖父母と一緒に暮らしてきた。熱が出た時も仕事に行く両親の代わりに看病もしてくれた祖父母。祖父は一年前に亡くなり、恩返しをする機会も失った。今、祖母は一人で過ごしている。七十五歳になった今でも農業をやっている。しかし、無理がたたったのか、高齢のためなのか足を悪くした。買い物に一人で行くことができない。欲しいものがある時は、母が休みの日に車で連れて行っている。車に乗る時も足が上がらず時間をかけてようやく乗ることが出来る。車を降りてから、スパーの入り口まで行くのも祖母にとっては一苦労だ。私は車から降り、カートをとって祖母のもとまで行く。私たちにとっては何ともない段差、何ともない距離でも大変だ。そのような状況は、実際に見て、体験しないとわからない。見もせずに「このくらい大丈夫じゃないの」は不親切な態度だ。

そういう私も祖母の買い物についていくのは正直しんどいし、嫌になる。時間もかかるし気も遣う。でも祖母の「今日はありがとう」というたった一言で、そんな気持ちもどこかに飛んでいく。そのような経験から、高齢者の役に立っている仕事かと思つたのだ。

高知には山間部に住んでいる高齢者もいる。病院に行きたくても病院に行く手段に悩む人も少なくない。病院が訪問して、治療や看護ができればと思う。検診などもできればいいと思う。そんな時、訪問看護師の存在を知った。多くの高齢者が喜ぶ姿が見たい。高齢化が進む高知。これからは今よりももっとたくさんさんの介護や看護が必要とされる。高齢者の方が今まで頑張つて働いてくれたから、今の社会がある。高齢者はもう用なしなんて言うてはいけない。感謝の気持ちも持って、私のできることをやってみようと思う。

おばあちゃんの知恵というように、高齢者から学ぶことはまだまだたくさんあるはずだ。看護や介護は大変だと思う。でも、それ以上によりがいのある仕事だ。

私のできることを、いっぱい勉強して夢に向かって進んでいくこと。あきらめることなく突き進もうと思う。

『三度目の夏』

土佐女子中学校一年 中平千尋さん

中学の部
入選

祖母が亡くなって三度目の夏を迎えました。

お盆には、親せきが集まり、祖母の好きだったちらしやそうめんを作り、祖母の写真の前に、楽しい時間を過ごしました。亡くなったときは、とても悲しくて大泣きました。祖父は大

丈夫か、父は大丈夫かと、すごく心配になりました。時間が解決してくれるとよくいますが、三年たって、祖母の写真と共に優しい時間を過ごせるようになりました。みんなの心

の中にちゃんと祖母は残っていると思います。祖母が病気の時、介護といっても私にできることは、ありませんでした。

祖父と父は、家を平屋にし、手すりをつけ、トイレを広くし、家の段差をなくしました。家の中で転ばないように、祖母が家で過ごしやすいようにしました。

私は、外に出られなくなった祖母が外の景色を楽しめるように、母と二人で、庭にたくさんのお花を植えました。それだけで、「ちゃん、ありがとう」と喜んでくれました。

亡くなる前に、祖母は、「骨そしょうしょう」で、歩くのもやっ

とで、いつも痛い痛いといっていました。家には、ヘルパーさんが来てくれて、身の回りのお世話をしてくれていました。トイレにつれていってくれたり、お風呂に入れてくれたり、日常生活を手伝ってくれました。私もトイレまで連れていこうとしたけど、『転んでしまう』とこわい思いをしたことがありました。力のない私にできる事はそこではないと思います。介護はすごく力のいる仕事だと思いました。

ヘルパーさんは、話好きの祖母の話をいつも笑いながら「へー」と楽しそうに聞いていました。それもすごいことだと私は思いました。明るい人がらで、よく私達家族も一緒に笑っていました。

高齢化社会が進み、みんなが支えなければいけない社会になりました。私のできることはまず、困っている人、手助けを必要としている人に、声をかけていこうと思います。その人のできる事のじゃまはしてはいけなく、見守るという事は私にできると思います。また、声を出して回りの人に助けを呼ぶことが私にはできます。社会全体として、優しい世の中になればいいと思います。

人はいつか若い人も年をとります。必ず人は亡くなります。それなら、みんなが、優しい気持ちで人を支え、また、人に支えられて手を取りあえる世の中になればいいと思います。笑いながら、亡くなっていけるような社会になればいいと思います。

『認知症の方を支えるために』

土佐女子中学校一年 五十田彩乃さん

中学の部
入選

日本は、少子高齢化が進み、後期高齢者の人数がど

んどん増え、認知症や介護の必要な人が増えるとか、介護の担い手が不足するので、外国人や介護ロボットの活用を考えているなど、ニュースや新聞で高齢化問題がよく取り上げられています。

認知症は、年齢を重ねるほど発症率が高まると言われており、誰でも発症する可能性があります。とくに、高齢化が進む日本では問題になってくると思います。また、私は、現在、徐々に認知機能が低下している九十歳の曾祖母と暮らしているため、今回、認知症の方を支えるためにどうすればよいかを考えたいと思いました。

認知症は、脳の老化による「もの忘れ」とは違い、様々な原因で、脳の細胞が障害を受けたり、働きが悪くなったりしたために起こる病気です。原因によって、症状は様々ですが、だんだんと理解する力や判断する力がなくなったり、新しいことを覚えることができなくなったりして、生活に支障が出てくるようになります。しかし、すべての能力を失うわけではありません。

曾祖母は、食事の準備や掃除は身体機能の低下もあり、祖母や母親の支援を受けています。しかし、自分で食べることができ、洗濯物をたたんでくれたり、食器を洗って片づけることなどができます。しかし、同じことを繰り返して言ったり、自分がどこかにおいてわからなくなったものを、私や家族の人が持つて行ったと怒ったりします。

母に聞いたり、認知症のパンフレットを読んだり、テレビで見るとして、認知症のことはある程度知っていましたが、自分が持つて行っていない物を持つて行くと怒られたりすると、つい、腹が立ち曾祖母にひどい言葉を言ってしまふことがあります。認知症の人は、言われたことをすぐに忘れてたり、今までできていたことができなくなったりするために、とても不安な状態にあります。それなのに、ひどい言葉をかけたりすると、ますます不安になり、さらに認知の機能が低下したり、症状がひどくなってしまうそうです。

私は、自分が疲れていてなかなか優しい言葉をかけられなかつたり、ついいらつときてひどい言葉をかけてしまつたりしていましたが、この事を知り、曾祖母が不安にならないよう、今以上にひどくならないように、優しい言葉をかけたり、一人にならないように話相手になったりしてあげたいと思います。

認知症を知らなければ、認知症の人にどう接すればよいかわかりません。

まずは、認知症を理解することがとても大切だと思いました。そして、できないことを責めるのではなく、話を聴いたり、できていることを認めたり、やってもらっていることが大切だと思いました。

『介護・身近な人を心配する心』

いの町立吾北中学校三年 中岡陸斗なかおかりくとさん

中学の部
優秀

僕は、今、親元を離れて父方の祖父母の家で暮らしています。祖父と祖母、そして僕の三人で仲よく暮らしています。今は祖父も祖母も元気で、いつも川の向こうの家まで届くくらい大きな笑い声が聞こえてきます。僕も祖父から元気をもらって日々を過ごしています。

僕は、来年の三月には中学校を卒業し、進学のために、両親が生活している愛知県に帰る予定です。祖父は今年六十五歳、祖母は六十九歳になります。家族が待つ愛知県に帰ることは楽しみにありますが、祖父母だけを残して僕が去ることは少し心配でもありますが。僕がいなくなっただけの高齢者二人の生活は大丈夫だろうか心配してしまいます。以前、一度だけ祖母に、自分がいなくなっても平気かと尋ねたことがあります。そのとき、祖母には、「早く帰りや。」

と言われました。多分、僕を心配させないように配慮した末の言葉だと思のですが、少しさびしいと思いました。

祖父は、今はとても元気です。しかし、いつか誰かの力を借りないと生きていけない時が来ると思います。今僕が住んでいる地域は、若い人が少なく、いわゆる過疎高齢化と呼ばれる場所です。しかも、祖父母の親せきは僕たち家族しかいません。僕がいなくなつてからの祖父母の家では、電球はだれが替え、難しいパソコン操作は誰がするのでしょうか。僕がいなくて、祖父母のどちらかがなくなるとはならないのですが、とんとん成長する僕と違って、とんとん衰えていく二人にとっては大変な作業になるのは間違いありません。どちらかが病気になるってなるとかなるかもしれません。二人同時に体を壊すと頼る人は誰も居ません。二人にはできれば一生元気なまま生きてほしいですが、人間の寿命から考えるとそうはいかないでしょう。いつか、二人にも「介護」という現実がのしかかってくるかもしれません。僕が住むいの町吾北だけでなく、日本は少子高齢化が進んでいます。僕の通う中学校にもその波は押し寄せてきていて、全校生徒四十三人しかいません。若い人はとんとん街に出ていきます。

僕は、高齢者の祖父母と暮らしているので、高齢者は大好きです。祖父母の介護をしなくてはならないと言われれば、僕は、祖父母の介護をする気です。三年間、親元を離れた僕を育ててくれた恩をきちんと返したいと思いますし、祖父母に対する愛情を感じているからです。もしかすると、両親よりも祖父母と一緒にいた時間の方が濃いかもしれません。年をとることが大変だということ、授業でいろいろ体験してよく分かりました。もし、祖父母が認知症になったとしても、僕はずっと二人を大事にしていきたいと思っています。「介護」について、祖父母と暮らしていなければこれほど深く考えることはなかったのかもしれない。

『高齢者社会と介護』

土佐女子中学校一年 國松千聖くにまつちさとさん

中学の部
優秀

介護といっても高齢に伴う身体的、精神的なものや、障害などでの介護が必要な方もいます。

ますます進む高齢化や少子化、核家族化、地域のつながりがうすくなってきている現在、介護も大変になってきていると強く感じます。よくニュースでも、高齢のご夫婦が二人暮らしで介護をしていて介護疲れで殺害など悲しい事件もあります。また、老人介護施設での虐待や殺人も起きています。このような事件の背景には、たぐさんの問題・原因があるのだと思います。

昨年、私の祖母が腸に穴が開き、二週間ほど緊急入院しました。穴がふさがるまでは、飲食禁止でした。治すためとはいえ、数日間いっさい何も口にできないのは本当に辛そうでした。体力も弱り、気持ちもおかしくなっていて、私は、祖母がどうなってしまうのか本当に心配しました。祖母と同じ部屋には、他に八十から九十代くらいのおばあちゃんが入院していました。看護師さんは、体が動かなくなったり、少し認知の方に対しても、上手に話しかけたり、対応していて、本当に大変な仕事だと思ひ、改めて感心しました。多くの患者さんの命を預かるという、肉体的にも精神的にも大変な業務でえらいと思います。施設での介護職の方も同じで、体の動かない方を支えたり起き上がらせるのは、全体重がかかり、なかなか体力のいることだと思います。

介護について調べると、「介護職は専門職であるが仕事の肉体的・精神的負荷が大きく、仕事の難易度の高さや負荷の大きさや低賃金のため、恒常的な労働力不足の状況である。」とありました。今後ますます高齢化社会になると、たぐさんのお年寄りを支えていかなければならない世の中になり、大変になると思ひました。

家族が病気や障害で介護が必要となると、食事、排泄、着替え、入浴など、たぐさんの生活面で助けが必要です。介護が必要な人を抱えた家族の苦勞や、介護される側の気苦勞なども多くあるだろうし、費用面でも大変なことだと思います。自分にとってあたりまえだと思っていた健康であることのすばらしさを考えました。もし、家族の誰かが突然病気になったら、私はパニックになると思います。でも、今後、なにかあれば、私も全力でサポートしたいと思うし、介護について考えていきたいと感じました。

『将来を決めた祖父の言葉』 高知県立高知農業高等学校三年 樋口将也ひぐちしょうやさん

私の祖父は認知症だ。現在はデイサービスに通っている。いつもは祖父の姿を見ることもなく学校に通っているが、今年の夏休みにはデイサービスの職員が祖父を迎えに来たり、祖父が帰ってきたところを何度も見かけた。職員が支えてはいたが、祖父はしっかりと足取りで歩いていた。少し元気を取り戻したようであれしくなった。

祖父は認知症治療のため、作業療法を受けている。病気を発症した時は表情も暗く、話しかけても反応がなかった。しかし、現在では私や私の家族が話しかけると以前のように話すことはできないが、それでもニコニコと笑顔を見せてくれるようになった。この前も、私が「ただいま」と声をかけると、「おかえり」と返してくれた。何気ない挨拶だったが、その「おかえり」が祖父の元気を示しているようでとてもうれしい。

作業療法のおかげで祖父が受けていた治療の効果が長続きするようになったという話も聞いた。作業療法士のすごさを家族みんなが実感している。私が作業療法士を目指そうと思ったのは、この話を聞いてからだ。

夏休み中、一度だけデイサービスでどんなことをしているのかを祖父が教えてくれた。祖父曰く、牛乳パックを切って点数を書いた的を作り、ピンポン玉をその的の容器に入れて点数を競うというゲームをしたという。デイに通っている人たちと仲良くやるゲームだと言っていた。説明しながら実際にその的を作ってくれ、家族みんなをやった。とても盛り上がった。単純な遊びだったが、祖父の生活を知ることができる出来事だったし、祖父の認知症が治ったのではないかとまで思った。祖母は「普段全然しゃべらんにいきなり話し出したき、びっくりした。」と言ってとてもうれしそうだった。私や私の家族も祖母と同じで祖父が元気に話している姿を見るのが久しぶりだったのでとてもうれしかった。

そんな祖父だが、認知症の治療のため一時期入院していた時があった。私は家族と一緒に定期的にお見舞いに行っていた。祖父がもうすぐ退院という時にもう一度お見舞いに行った。その時に祖父が「あんたらあのおかげよえ。」と言ってくれた。この言葉が作業療法士になるという夢を後押ししてくれた。将来は、高齢者や障害者、その家族を支え、感謝してもらえそうな作業療法士になりたいと思う。祖父への恩返しもかねて、元気なところに栽培していたユリのハウスに連れていきたいと思う。作業療法士として、園芸セラピーを行う、それが私の次の夢だ。



『祖父の介護を通して』いの町立吾北中学校三年

久保嵐士くぼあらしさん

僕の父方の祖父と祖母はたいへん元気で、本当に六十代後半なのかというくらいに快活で、よく動きます。しかし、母方の祖父は、小脳の病気にかかってしまい、声も出ず、体もうまく動かせずにかなり長い間苦しみました。そして、とうとう昨年の夏に亡くなってしまいました。亡くなってしまふまでの長い間、僕たちは一家で協力して、祖父や祖母の手助けをしました。いわゆる「介護」の状態だったと思います。

学校や部活動が休みのときは、家族七人全員でそろって祖父母の家に行きました。母は祖母の食事の準備や掃除などの家事手伝い、父と僕たち五人の兄弟は、庭の草引きや畑の世話をしたり、家の中や庭の段差を少しずつなくしていったりと全力でサポートしていききました。とても大変でしたが、祖父には小さいころから大変お世話になっていたし、祖父が大好きだったので、祖父のために体を動かすことは全然苦にならず、必死でした。僕たち家族は、祖父母のために必死でしたが、あとから聞いた祖母の話によると、実質的なサポートだけでなく、僕たち家族が祖父母宅に行くことだけでも大きな心の支えになっていたそうです。確かに今考えてみると、家に僕たちが行ったときには、寝たきりに近かった祖父が、必ずベッドから重い体を起こして

「嵐士、お菓子でも食べるか。」

とともうれしそうに話しかけてくれました。僕は、そんな祖父に最近の学校での出来事を話したり、祖父の話を聞いたりしていました。うまく声が出ないはずなのに、僕とたくさん話をしてくれました。祖父母の家は僕にとって一番心地の良い場所でした。それは今でも変わりません。

僕たちは一生懸命祖父のためにがんばってきましたが、人間の命の限りには勝てず、祖父の命の炎は消えてしまいました。僕は、祖父の死によって、初めて人の死を目の当たりにしました。みんな悲しみましたが、祖母は僕以上に悲しみ、苦しみました。

祖父の闘病を支えた経験から僕には分かったことがあります。介護が必要な人にとっては、一般的には身体的なサポートが最優先と考えられています。しかし、それ以上に、心の支えとなれるようなサポートが必要なのです。優しく温かい「心の支え」を必要としているのです。簡単に「介護」と口で言うのと、実際にサポートしてみるのではやはり違います。僕には、祖父にずっと元気で生きていてほしいという思いがあったので、がんばりました。僕のがんばりを支えてくれたのは、紛れもなく祖父です。学校で、高齢者疑似体験をしました。やはり年をとると体は思うように動いてくれないということが分かりました。闘病中の祖父は、体を起こすことがどれだけ大変だったか。心が痛くなります。介護は大変でも、介護される人はその大変さをきちんと分かっていると、思います。きちんとサポートできる大人になりたいと思いました。



第8回こうち介護の日
ポスター・作文コンテスト

受賞作品

作文
部門

第8回

こうち 介護の日

11
いい日 11
いい日、笑顔
がいいね

平成29年11月
高知県

